

〈第35回学会大会 地域研究〉

「歴史文化探訪」報告

田中 伸彦*

Leisure, Culture and History in Local, National and Global Scale

Nobuhiko TANAKA*

1. 「地域研究」の歴史・趣旨

第35回学会大会の初日に、「緑に囲まれたキャンパスで有名な国際基督教大学周辺を散策しながら、武蔵野から世界に向けた歴史文化を探訪する」というコンセプトで、「地域研究」を実施しました。

表-1に示したとおり、レジャー・レクリエーション学会では、2001年の第31回大会の際に、千葉大学園芸学部で植物観察会を開催したことをきっかけに、屋内の口頭発表やシンポジウムだけではなく、屋外に飛び出して「地域研究」を行うようになりました。

また、仙台の東北福祉大学で2003年に開催された第33回大会からは、「地域研究」を大会期間中の正式な活動として位置づけました。そのねらいは、体育学、福祉学、造園学、社会学など、実に多様な学術的バックボーンを持った当学会の研究者同士が、共通のフィールド体験をしながら、ざっくばらんに意見交換を行うことにありました。そして、その後の大会からは、レジャー・レクリエーションに関わる共通認識を深める目的のもと、大会ごとにテーマを設定して「地域研究」を継続的に開催しています。

2. 今回のテーマ「歴史文化探訪」について

第35回大会は、昨年（於：立教大学）に引き続き、東京で開催されることになりました。

昨年の「地域研究」では、大都市東京を意識して、テーマを「都市レジャーの今昔」としました。そして、江戸時代の幕開けから現在に至るまで、わが国の文化の中心として発展してきた江戸・東京の約400年の歴史の中で、都市レジャーがどのように変遷したのかについて見聞

を深め、ディスカッションを行いました。具体的には、平成最新のレジャー・レクリエーション空間である「六本木ヒルズ」と、江戸時代から戦前にかけてのレジャー・レクリエーションに関係する展示が豊富な「江戸東京博物館」を訪れて、都市におけるレジャー・レクリエーションの今昔を比較しました。さらに、2箇所間の移動には、昭和に生まれたレジャーの傑作ともいえる「はとバス」を使い、実際に乗車体験してもらいました。要するに、昨年は、都市レジャーについて、江戸から昭和、平成にかけての時代の流れという「時間軸」から、レジャー・レクリエーションについて検討することに主眼を置きました。

そのような意図を持った昨年のテーマを受けて、今年の「地域研究」では、「時間軸」ではなく「空間軸」から、レジャーを検討しようと考えました。

私たちを取り巻くレジャー・レクリエーション環境は、歴史や文化の変遷・変容という「時間軸」に大きく影響されながら、絶えず変化して、現在の形に落ち着いていることは言うまでもありません。ただし、一口に歴史や文化の変容といっても、地域、国、グローバルスケールと、様々な空間スケールによる影響があることを見落としてはなりません。

例えば、ある特定の地域に限ってレジャー・レクリエーション環境を見るだけでも、鎮守様のお祭りなど、ローカルスケールで地域に深く根ざしたものから、サッカーのようにグローバルスケールで全世界に共通してみられるものまでが渾然一体として存在しています。その傾向は都市になればなるほど顕著で、わが国最大の

表-1 学会大会における「地域研究」の歴史

《2001年	第31回大会	於：千葉大学園芸学部》	テーマ：千葉大学園芸学部キャンパスの植物観察
《2003年	第33回大会	於：東北福祉大学》	テーマ：独眼竜正宗と仙台城址
《2004年	第34回大会	於：立教大学》	テーマ：都市レジャーの今昔 (六本木ヒルズ・江戸東京博物館)
《2005年	第35回大会	於：国際基督教大学》	テーマ：歴史文化探訪 (深大寺・ICU湯浅八郎記念館・中近東文化センター)

都市である東京のレジャー・レクリエーション環境は、「空間軸」という側面から考察した場合、まさに様々な空間スケールの影響を受けた「坩堝」状態となっています。

またこれを別の角度から捉えると、都市では、余暇活動としてごく狭い地域をまわるだけで、地域に根ざしたローカスケールの歴史文化から、グローバルスケールの国際的な歴史文化まで、様々なスケールの歴史文化が手軽に体験できる訳です。これは、現代の日本の都市地域におけるレジャー・レクリエーション環境の大きな特徴であるといえます。

以上の点を鑑みて、今回の「地域研究」では、レジャー・レクリエーションの基盤となる「歴史文化」を地域・国・グローバルという「空間スケール」ごとに体験し、その違いを比較・検討することをねらい、テーマを「歴史文化探訪」としました。

当日行われたスケジュールの概要は、坂口正治学会副会長による大会の開会宣言（写真1）の後、まず地域スケールの代表事例として「深大寺」を訪れ、「武蔵野の歴史文化」に触れました。その後、国際基督教大学に移動し、緑に囲まれた美しいキャンパスを散策しながら、日本考古学や民芸品の収集で名高い初代学長の湯浅八郎氏を顕彰して学内に開設されている「湯浅八郎記念館」を訪問して「国スケールの歴史文化」を考えました。最後に、国際基督教大学に隣接している「中近東文化センター」で、キ



写真1 坂口正治副会長による開会宣言

（盛りだくさんのスケジュールであったため、開会挨拶はバスに乗りましてから行いました）

リスト教発祥の地でもあり、全世界に様々な文化的影響を与えた「中近東の歴史文化」を中心に、「グローバルスケールの歴史文化」について見聞を深めました。

なお、今回の「地域研究」は、2005年12月9日（金）に行われ、参加者は募集定員通りの15名でした。

3. トピック1：「武蔵野の歴史文化」

～深大寺～

「ローカスケールの歴史文化」を考える舞台として、歴史文化探訪の題材に選んだ場所は、深大寺です。深大寺は、東京では浅草寺に次いで古い歴史を持つ木々にかこまれた寺院です。また、重要文化財の「白鳳仏」や、門前の「深大寺そば」などでも有名です。

ところで、今回の大会開催校である国際基督教大学は、言うまでもなくキリスト教系の大学ですが、こちらにも緑に囲まれた美しいキャンパスが印象的です。

一方の深大寺は歴史古い歴史を持つ仏教寺院、他方国際基督教大学は戦後創設された50余年の歴史を持つキリスト教系の大学で、イメージ的にはなかなか結びつきにくいのですが、「木々に囲まれ、空間的に落ち着いた心地よい環境」という点に着目すると、両者とも、「武蔵野」というローカスケールの風土に強く支えられて、地域に深く根ざした空間を形成していることが分かります。

深大寺では、地元調布市のボランティアガイドの方に解説をお願いしました（写真2）。軽



写真2 「武蔵野の歴史文化」の解説風景（深大寺）

（ボランティアガイドの方の解説のもと、紅葉美しい深大寺を歩きました。ボランティアガイドの方が、手作りのパネルや自作の小道具をふんだんに用意して、非常にわかりやすい解説を行ってくれたことが印象に残りました）

快なトークだけでなく、解説板や写真、数珠をつくる木の実（ムクロジ）の実物などを実際に見せながら、非常にわかりやすい解説をしてくれました。また、今回の参加者の中には深大寺のそばで生まれ育った方や、仕事で昔近くに居住した方が少なくなかったようで、深大寺界隈の空間の変遷について、思い出を交えた熱いディスカッションが交わされていました。

また、昼食はフリータイムとし、各自でお気に入りの店を見つけてもらい、深大寺そばを堪能していただきました。

4. トピック2：「日本の歴史文化」

～国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館～

昼食終了後、10分ほどバスに乗り、国際基督教大学へ移動しました。そして、国際基督教大学の「緑に囲まれた美しいキャンパス」の環境を、実際に歩いて体験してもらいながら（写真3）、湯浅八郎記念館を目ざしました。

湯浅八郎記念館は1982年に開館した大学博物館で、館内は無料で公開されています。主な収蔵品は湯浅博士によって蒐集、寄贈された日本各地の民芸品、そしてキャンパス内に点在する遺跡から出土した先土器時代から縄文時代にかけての考古遺物などです。

当日は、学芸員の方に、日本の民芸運動全般についてや、湯浅博士と民芸連等との関わりについて解説していただきました（写真4）。また、本来は開催前であったのですが、今回は例外的に特別展の展示を見せていただくことができました。特別展のテーマは「子供の着物と孫



写真3 国際基督教大学キャンパスを散策する参加者



写真4 「日本の歴史文化」の解説風景 その1
（国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館）

（博物館の学芸員の方から、日本の民芸運動などを中心に日本の伝統文化について解説を受けました）

ごしらえ」です。「孫ごしらえ」とは出産のお祝いに、産湯布や子負い帯などを紺屋で詠える出雲地方の風習で、これらの珍しい品々を、子供の着物とともに展示してありました。この展示は、「子育て」という身近な風習を題材にしていることもあり、予想以上に参加者の関心が高く、学芸員の方の話に熱心に聞き入っていました（写真5）。



写真5 「日本の歴史文化」の解説風景 その2
（国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館）

（2006年1月から開催予定だった企画展「子供の着物と孫ごしらえ」を一足早く解説していただきました。「孫ごしらえ」とは、出産のお祝いに、産湯布や子負い帯などを紺屋で詠える出雲地方の風習です）

5. トピック3：「グローバルスケールの歴史文化」～中近東文化センター～

「地域研究」の最後の目的地は中近東文化センターです。中近東というと、なじみが薄いと

いう印象を受ける方も多いかもかもしれません。しかし、中近東は、複数の世界的宗教の発祥地であり、数千年にわたり、グローバルスケールで世界各国に文化的影響を与えてきた地域です。

中近東文化センターは、この様に時間的・空間的に壮大で、内容が豊富な中近東の歴史的文化を専門的に研究する場として、またその成果を公開する施設として、三笠宮崇仁親王殿下のご発意のもと、故出光佐三氏（出光興産創立者）の協力によって、1979年に国際基督教大学に隣接した場所に開館しました。現在は、中近東の専門家・研究者はもちろんのこと、一般の方々にも学校教育をはじめ生涯学習や市民活動に活用され、地域に開かれた施設として発展しています。

当日は、センター職員の方の解説のもと、常設展示室で、まず、旧石器時代からオスマン帝国までの中近東の歴史を通史的に見せていただきました。その中には、ロゼッタストーンやハンムラビ法典のレプリカをはじめ（写真6）、世界史などで名前は聞くものの、実際にはどのようなものなのか、なかなか知る機会がない展示をふんだんに見ることができました。また、企画展示室では、中近東におけるガラス文化の変遷についての解説を受けました。



写真6 「グローバルスケールの歴史文化」の解説風景（中近東文化センター）

（学芸員さんが解説している巨大な石のレプリカは「目には目を、歯には歯を」で有名なハンムラビ法典です。）

6. おわりに

以上、「地域研究」の概要を報告しました。今回の「地域研究」では、地域・国・グローバルスケールの歴史や文化が、私たちと密接につながっていること、また、わが国の都市地域では、各スケールの歴史文化について、ほぼ1日かければ体験できる環境にあることを改めて実感できました。今回の「地域研究」をきっかけに、レジャー・レクリエーションを「空間軸」という側面から捉える目を深めて行ければと考えています。

なお、第35回大会では、会員への普及を行う目的で、ポスター発表会場の入口に「地域研究」のパネルを展示しました（写真7）。学際的な研究者が集まるレジャー・レクリエーション学会において、会員間の相互交流を深めるためにも、このような地域研究を継続することは重要だと思います。今回の地域研究には参加できなかった方々も、是非次回の地域研究に参加して、ディスカッションの輪に加わって頂ければ幸いです。



写真7 大会期間中のパネル展示

（「地域研究」の翌日、報告と宣伝を兼ねて、ポスター発表会場の入口にパネルを展示しました。パネルの横に写っているのは筆者です。）